

# リーダーの本棚

九州電力社長

池辺 和弘氏



いけべ・かずひろ 1981年(昭56年)東大法卒、九州電力入社。2018年から現職。今年3月まで電気事業連合会会長を務めた。大分県出身、66歳。

読書は生活の一部になっている。リチャード・ムラー教授の著書に出合ったのは2015年ごろです。まず『エネルギー問題入門』を、その後『今この世界を生きているあなたのためのサイエンスI・II』を読みました。1987年から2年間、米シアトルに留学しました。経済学の知識がなく英語も不得手だったので苦労しましたが、その経験から今も英語の本を手にとることが多く、これらもまず英語版で読み、日本語版も手に入れました。物理学を教えるムラー教授は、事実からものを見ることの大切さをわかりやすく、身近な事例で解説します。たとえばガンリンとチョコチップクッキーと爆薬の重量あたりのエネルギー量

## 事実で考え流れつかむ



を比べると、最もエネルギー量が小さいのは爆薬です。教授は「数字を無視し、物理学を無視して定められた政策や法律は、自然界の法則によって必ず覆される」と指摘します。地球環境問題は重要だけれども、情報丸のみにもできないとも思っていたときにこの本に出会いました。電力やエネルギーについては皆さん関心がありますが、うまく考えを伝えられないもどかしさを感じることがあります。この本は読んでもおもしろいし、説明の仕方は参考になります。ムラー教授の著書や『ファクトフルネス』『サビエンス全史』に通じるのは事実で考え、大きな流れをつかむ大切さです。人間はなぜこうなってきたのか。歴史や経済の流れを考えることは知的好奇心を刺激します。

### 【私の読書遍歴】

- 《座右の書》  
『今この世界を生きているあなたのためのサイエンスI・II』『エネルギー問題入門』(いずれもリチャード・ムラー著、二階堂行彦訳、楽工社)カリフォルニア大学バークレー校の物理学教授が、エネルギーや地球温暖化などの問題を平易な言葉で解説している。
- 《その他愛読書など》  
①『ファクトフルネス』(ハンス・ロスリング、オーラ・ロスリング他著、上杉周作、関美和訳、日経BP)「10の思い込み」に陥らないためにデータを基に世界を見る習慣を説いている。  
②『サビエンス全史』(上下巻、ユヴァル・ノア・ハラリ著、柴田裕之訳、河出書房新社)  
③『11人いる!』(萩尾望都著、小学館)  
④『リプレイ』(ケン・グリムウッド著、杉山高之訳、新潮文庫)  
⑤『社長 島耕作』(全10巻、弘兼憲史著、講談社漫画文庫)  
⑥『本気になって何が悪い』(唐池恒二著、PHP研究所)

大学時代はSFに夢中になった。SF小説が好きです。小学校のころから江戸川乱歩やアーサー・コナン・ドイルの冒険小説や推理小説を好み、東京での学生時代はSFの文庫本で下宿がいっぱいになりました。

『11人いる!』を読んだのは、大分県で過ごしていた高校3年生の夏です。受験も迫っているのに、大学に行く意味が見いだせず、勉強に力が入りませんでした。そんなときに読んだのがこの作品です。妹が持っていた少女漫画誌に載っていました。

宇宙大学への入学者を選抜する試験の舞台となる宇宙船に、受験生は10人。ストーリーがおもしろく、登場人物の個性も多様です。11人が刺激し合いながら困難を乗り越えていきます。これを読んで大学も良いところではないかと、進学へのモチベーションが上がるきっかけになりました。

SFの作品でも生まれ変わりや、時空を超えるテーマが好きです。『リプレイ』もそんな1冊です。43歳で死亡する主人公が人生をやりなおします。18年に社長に就任した。

『社長 島耕作』を読んだのは社長就任の内示を受けた後です。社長というのを何をすればいいのか誰も教えてくれません。まだ内示ですから誰にも言えない悶々とした時期に手にとりました。

読んでみるとおもしろい。続けて会長編を読み、専務編から課長編までさかのぼり全編を読破しました。ただ今は『社長 島耕作』は手元にありません。取引がある別の会社の社長に就いた方から「社長は何をすればいいのか」と聞かれたので全部渡しました。

『本気になって何が悪い』はJR九州の社長、会長を務めた唐池恒二さんの著書です。鉄道事業での斬新なアイデアや外食などの新規分野を開拓した経営は九州で同じインフラを手掛ける当社にも参考になります。

九州電力は現在、東京や大阪、海外でも電気を売っています。しかし、ここまで育ててもらったのは九州です。九州への一番の貢献は、低廉な電力を安定的に供給することです。同時に私たちも不動産や海外事業、通信などの新規分野を伸ばしていかないと株主の期待には応えられません。

07年に熊本支店に勤務していたころからメモ帳に読書で出合った言葉や、テレビや映画のセリフを書き込むようにしています。もう50〜60件になるでしょうか。前述のムラー教授の言葉もこの中にあります。いつも手元に置き、悩んだときに読み返します。私にとっても本当の「座右の書」はこのメモ帳と言えるかもしれません。

(聞き手はコメンテーター 松尾博文)

### ここはすべての夜明けまえ

間宮 改衣著



「二二三年十月一日」これは九州地方の山おくもつだれもないばしょ」にて物語は幕を開ける。語り手の「わたし」は101年前、25歳のときに身体を機械化し老化を防ぐ手術を受けた。周囲には、もはや人間の姿はない。おしゃべりする相手を失った「わたし」は「ひまつぶし」に、手術をすすめた父、兄とふたりの姉、「わたし」の恋人だったおいつら、死んでいった人たちの思い出を家族史としてつづけてゆく。

ひらがなを多用する語りによって、読書の速度は必然的に抑

### ケアするラジオ

金山 智子編



ラジオには親密なイメージがある。1920年代後半の米国では既に、リスナーの目の前で語りかけるような話者の口調が規範化されていたという。フランクリン・ルースベルト大統領は「炉辺談話」によって大恐慌や戦争で不安を抱える国民を励まし癒やした。本書ではこうした歴史や理論的考察に加え、ラジオを通じた心理的なケアの実例がいくつも報告される。

奄美大島のコミュニティー局では、高齢者に長生きの秘訣や今後の夢などを聞く企画により、引きこもりがちだった人が

### 機械化と人間のありよう

一方でこの文章の成り立ちには、漢字を書くのが「画すうが」おおくつかれなくともめんどくさい」からだと言明される。疲れ知らずの機械の手をもってしても、面倒臭さは乗り越えられないのだ。ロボットによる介護を拒み人肌を求め続けた父、仕事と子育てにせわしなく、AIの運転ではない古い車でスピードを出すやねえちゃん。そして「わたし」が持ち続けている、ある後悔。テクノロジーの進化と人間のありようを静かに問いかける。(早川書房・1430円)

### 励まし癒やす声のメディア

いきいきし始めた。話すことだけでなく、メディアに出たという出来事も自己肯定感を生む。放送はCD化し、家族に渡した。その人が亡くなった後のグリーフケアにも役立つという。

刑務所内ラジオにメッセージを投稿する受刑者たちは、投稿の過程で初めて自分の言いたかったことや感情に気づくことがあった。規律で固められ、意思決定は著しく制限される刑務所内の生活。所内ラジオは、立ち直った後の生活を思い描き、語るうえで貴重な存在といえる。

時代遅れとみられがちなラジオだが、配信やポッドキャストなど声のメディアは多様化し、健在だ。職場など新しい環境に心身ともに疲れてしまった人には、ラジオのスイッチを入れ、本書を開くことをすすめる。(さいはて社・2860円)